

分科会 1

シンポジウム「応援しよう！ 子どもの読書—学校・家庭・ 地域で支える」

子ども読書活動交流集会

パネリスト：山田 万紀恵（川越市立
高階小学校司書教諭）

谷部 久美子（さいたま市立七
里小学校司書）

萩川 たえ（越谷市立東越谷小
学校図書ボランティア）

木下 通子（県立春日部東高校
司書）

コーディネーター：福田 孝子（三郷市読書活
動支援員）

助言者：栗原 勝（朝の読書連絡会長）

実践報告 1 司書教諭の立場から

山田万紀恵氏（川越市立高階小学校司書教諭）

1 川越市での取組

「小江戸読書マラソン」という 30 冊読むと完走証をもらう取組を川越市で行っている。子どもたちも楽しみにしていて、完走する子どもが多い。子どもたちに強制するのではなく、良い本を揃え、いつでも図書館に来てもらえる環境を整えることが大事。

2 図書館の使い方の指導

授業の空き時間（週 1・2 時間）に図書館の使い方の指導やパネルシアターなどを行っている。

3 毎週金曜日の朝 20 分間読書タイム

川越市は読書ボランティアが全小学校に入っている。高階小学校では毎週金曜日にボランティア「お話しポケット」による読み聞かせがあり、読み聞かせ後は、必ず一緒に話し合う時間を持つようにしている。

4 図書整理員（学校司書の仕事）との連携

川越市は図書整理員が週 2・3 日入っている（2 校兼務）。図書整理員との連携が本当に

大切で、しっかり取るようにしている。

5 まとめ

本の選定は図書館の命と言っていいくらい大切。良い本を選んで図書館の環境を整え、人的環境として司書教諭と図書整理員と読書ボランティアが連携を取り、学校全体で子どもたちの読書推進ができる環境作りをしている。

実践報告 2 学校司書の立場から

谷部久美子氏（さいたま市立七里小学校司書）

1 さいたま市立図書館と学校図書館連携の歩み

第 1 期 昭和 62 年～平成 6 年：市立図書館職員が学校訪問や見学をし、アンケートや面談を実施し、学校図書館の実情を調査。

第 2 期 平成 7～10 年：平成 7 年学校図書館司書配置開始。平成 10 年「学校図書館支援センター」オープン。

第 3 期 平成 11 年～：平成 11 年度旧浦和市で学校図書館司書全校配置。平成 19 年度さいたま市全校（小学校 102 校、中学校 57 校）に学校図書館司書（週 4 日、1 日 6 時間勤務）を配置。



2 学校図書館司書の役割—子どもと本を結びつける

①環境整備：掲示や案内表示を整備し、図書館は楽しくてホッとできる場所と感じてもらう。②資料整備：資料の選定購入。③利用サービス：貸出、読み聞かせ（図書の時間は低学年にはほぼ毎週読み聞かせ。年 3 回のオリエンテーション・本の紹介・お話し会）など。

3 連携

司書教諭とボランティアとの連携も重要。また「資源共有システム」として①さいたま市立図書館の学校図書館支援センター（授業に使う資料の団体貸出）、②各学校図書館（全蔵書約 140 万冊検索可）、③さいたま市教育研究所図書資料室。①②③を配送業者が巡回。このシステムを活用して相互利用している。

4 まとめと課題

学校図書館にはそれほど本に興味がない子も来る。そういう子にも、本やお話の楽しさ、調べることのおもしろさを知ってもらいたい。一番身近にある学校図書館はきめ細かく子どもたちの読書活動を支えることができる位置にあるので、個々に向けたサービスができればと考える。また、学校教育の場から社会教育である公共図書館の活用に発展していけるような声掛けもしていきたい。

実践報告3 ボランティアの立場から

秋川たえ氏（越谷市立東越谷小学校図書ボランティア）

1 発足と活動

平成 14 年の夏休みに有志でおはなし会を開催したことをきっかけに、読み語りボランティアを立ち上げた。毎週木曜日の朝（15 分）活動している。絵本やおはなしには、その時間を共有してこそ味わえるおもしろさがある。その楽しさが、いずれ子どもを読書に向かわせると思う。また、市内の小・中学校の図書ボランティアの交流会があり、問題点などを話し合うことができ大変助かっている。

2 図書の選書

購入図書の選書に協力しているが、業者が持ってきた本から選ばなくてはならないので困ることがある。読み語りで使いたいような良い本を学校図書館に置いて、子どもたちがいつでも手に取れるようにしてもらいたい。

3 学校との連携

越谷市は学校司書が全校配置ではないため、

一日も早い全校配置を願っている（今年度から小中学校各 6 校に、週 1 日入った）。基本は顔を合わせて話すこと。司書教諭は多忙なので連絡ファイルを使い、必要なときは話し合う。校長先生にも活動状況を知ってもらうために話す時間を作っていただいている。

4 ボランティア同士の連携

ボランティアは 30 名近くいるが、役員は毎年替わるようにしている。いろいろな人が関わることで、ボランティア活動を理解し、温度差がなくなり、ボランティア自身に自覚ができる。

実践報告4 高校司書の立場から

木下通子氏（春日部東高校司書）

1 高校図書館では

埼玉県の高校では専任・専門・正規の形で司書が配置され、いつでも図書館にすることができ、本の貸出のほか、授業でも活用されている。学校図書館は子どもの自立を助ける場所。本を通して子どもの育ちを助けたい。

2 学校との連携

学校の職員として学びを支え、司書教諭の先生と連携して、行事や課題に対しての資料提供を行う。心がけているのは「誰が来てもいつでも資料を提供するよ！」というスタンス。授業の中でも図書館の使い方を説明し、親しんでもらう。公共図書館も使えるような良き利用者を育てたい。



3 他機関との連携

県内の高校図書館、県立図書館と相互貸借をし、連携している。

幼児期はブックスタートや、幼稚園などの読み聞かせが熱心だったりするが、小・中学校で学校司書がない市町村の子どもは、高校の司書が初めて出会う司書。子どもたちの読書を支えるために協力できることはないかを考えている。高等学校図書館研究会として、市内の高校司書が、小学校の図書館の本の整理を手伝いに行く取組などを始めている。

〈質問・意見・情報交換〉

司会：心の居場所づくりとしての学校図書館の活用も言われ始めている。司書教諭・学校司書・読書ボランティアで学校図書館を支えていくべきだが、司書がいらないとどうか。



山田：川越市も30年以上前は学校図書館に鍵がかかっていた。図書整理員さんが入ったことで、図書館がいつもきれいになった。子どもたちが調べたいときに図書館に行って調べられなければ図書館ではない。そのためには1校に1人毎日必ず人がいて、子どもたちが登校している間はいつでもサポートできるような図書館作りを願っている。

司会：学校司書だからできることは？

谷部：毎週利用してくれていると、個々の子どもたちがわかってくるので、次の本を手渡すようなサービスを心がけている。

木下：高校で絵本を読んだり、ブックトークをしたりする。高校生も読んでもらうことが好き。集中力が増すかも(?)。そこにある本をうまく使うのも司書の腕の見せ所。

司会：谷部さんや木下さんのようなステキな司書がすべての学校にいればいいですね。

学校に司書が入っている場合、読書ボランティアとの関わりはどうしているか。

山田：読書ボランティアが入るとき図書整理員も一緒に読み聞かせをし、記録を取る。蔵書点検も司書教諭・図書整理員・読書ボランティアの三者で行う。皆で連携していくのがベスト。図書館の組織の中に学校司書がいて読書ボランティアがいてコーディネートするのが司書教諭。(後輩を育てるのも大事)

司会：司書教諭が要となり学校図書館をコーディネートしていくべきだが、そのためには学校司書の存在が欠かせない。

木下：図書館経営をどうするかしっかりした理念がないと、ボランティアはどうしてよいかわからない。山田先生のような司書教諭をどうやって増やしていくか話し合うべきだ。

司会：担任も持っているため大変忙しいが、小中学校の場合は司書教諭が要になるのが本来あるべき姿。読書ボランティアの方々に支えられ、子どもたちの読書環境が整えられている状況がわかってきた。

山田：学校図書館の場所がたいいてい遠いところにある。明るくて居心地のよい、子どもたちが来やすい場所で、魅力的な良い本と出会って心が暖くなるような図書館作りをめざしたい。

司会：子どもたちへの本の手渡し方で工夫していることは？

谷部：子どもたちが手に取りやすい本、勧めたい本なども含めバランス良く。1冊でとどまらず、広く深く読書を進めていける本を手渡せるような蔵書作りを心がけたい。

秋川：シリーズ・関連の本・作者の紹介をし、図書館へ繋げるよう心がけている。特設コーナーで季節の本やことば遊びの本などの展示もする。紹介した本が学校図書館に並ぶよう、常に学校に働きかけていきたい。子どもにはいろいろな本に出会ってもらいたい。そのためにも良い本を選ぶ力、伝える力が必要なので、スキルアップも大事。小学校で読み語り

を経験した子どもたちは、中学校でも人の話がしっかり聞ける。読み語りを通して子どもたちの成長を感じるのはとても嬉しいこと。



木下：本は強制されて読むものではない。個人情報やキチンと守りながら信頼関係を築きあげ、子どもたちが自ら学んで発見していくような本と場を提供したい。

会場から①：県民サイドからの要望として、パネリストにユーザーサイドからの話がないと思うので、ぜひ入れてもらいたい。自分はコンサルタントをしているが、国際社会で日本人の英語力と文化力が落ちていると感ずることがある。子どもの時にどんな本を読んだかは大事である。

山田：今の子どもたちは、世界中で親しまれている「ハリー・ポッター」のシリーズを読んでいるので、共通の本の話題という意味では良いかもしれません。

会場から②：狭山市立図書館で司書をしているが、狭山市は学校に司書が配置されていない。埼玉県の中で子どもの読書環境にこんなに格差があるのはゆゆしいこと。司書の配置はそれぞれの自治体の問題ではあるが、この「県民のつどい」で解消の道筋が見えたら良いのだが…。司書教諭が身を削ってという今の状況も何とかならないだろうか。

司会：三郷市では平成 20 年度に「読書のまち三郷」と打ち出した。今年度 6 月から、業務委託ではあるが、初めて週 2 日学校司書が入った。そして、私が読書活動支援員という形で週 3 日入り、学校図書館をサポートし、

司書教諭の先生や子どもたちの読書活動や PTA の研修などの支援をしている。図書館に司書が入ったことで、見違えるほど変わった。図書館だけでなく司書教諭が動きやすくなり、司書教諭としての活動ができるようになった。また、学習指導要領が変わり、教科書にたくさんの本や読書活動が紹介されている。本の力が文化の力になる。文化がこれからの人を作る。これからがさらに皆さんの出番！読書ボランティアはもちろん、学校司書が入っていないところは声を上げて配置を希望していきましょう。

木下：図書館に人が入るといことはその自治体にもものすごく大きな力となる。司書教諭は兼務の状況では無理。業務委託は反対だが、専任の人が入ることで図書館が目に見えて変わり、学校の流れが変わる。図書館を日の当たる場所に！

会場から③北本市で文庫をしている。学校図書館を考えるさいたまネットワークの事務局をしており、毎年、県内の学校司書の状況の聞き取り調査をしている。この会場の中にも、ボランティアも学校司書もおらず、司書教諭も熱心ではないという状況の方もいると思う。岡山県の状況の話聞き、学校図書館に人がいることでできることの多さ・大切さを知り、市に請願した。翌年から北本市は全校（8 小学校 4 中学校）で週 3 日学校司書が配置された。だが、十分ではなく、置かれたからといって安心でもない。維持することにエネルギーがいるが、始めれば始まる。ぜひ今日のを始める場にする町が生まれてほしいと思う。**栗原：**今日は熱心に集まっていただき、大変貴重な意見をいただいた。多く集まれば、大きな力になる。少し前まで若者の読書離れといわれたが、今はそうではない。朝の読書を推進している立場からも、皆さんにもっと自信を持って、それぞれの立場で子どもたちの読書を応援していただいたい。